

春夏秋冬

台湾徒然



第60回

「無薪休暇」

旧暦の歳末を迎えて、「無薪休暇」という言葉が流行だ。いわゆる無給の自宅待機である。IT関連で大量に発生し問題化しているという。

長期的にみれば、台湾経済は順調に成長を続けてきた。2010年の実質経済成長率ランキングによれば、台湾は10・8%で世界第5位、昨年度も4・51%の成長と試算されている。

ところが暮らしのほうは一向に向上不しない。政府の労働部門の調査によると、台湾人の平均賃金は2000年の3万8825台湾ドル（1台湾ドル＝約3円）からこの10年に4万1571台湾ドルへと7・1%増加した。しかし同じ時期に消費者物価指数が10・8%も高騰し、生活は「苦しく」なっているというのが実感なのである。

教育部（文科省）によると、大学の学費・諸経費はこの10年に8・2%高くなっているのに、大卒の平均初任給は2万8016台湾ドルから

2万6455台湾ドルと5・6%も減少。物価高騰を算入すると、この10年間に実質14・8%も目減りしている。大卒初任給が2万6000台湾ドル

とすると、日本円では7万8000円にしかならない。日本の平均の4割程度である。台北を旅行された方なら、デパートなどの店頭価格が日本とほとんど変わらないことに気付かれるであろう。マンションの家賃も日本の地方都市とさしたる差はない。

当然ながら若いサラリーマンの暮らしは楽ではない。とくに地方から単身台北に出てきた労働者の場合、自身で家賃を負担して生活を築くことは至難の業。まず一室を単独で借りることが難しく、知人などとシェアすることになる。

ここ3年間、台北の中古マンションの価格は、6〜8割も高騰している。業界の調査では、台北市で昨年マンションを購入した人の平均年齢は

37・3歳でこの3年間に4・3歳も老けてしまった。ちなみに一戸当たりの平均価格は1700万台湾ドルだったという。台北市内ではちよつとしたマンションの購入に5000万円は覚悟しなければならぬというから驚きだ。一人あたりの名目GDP（2010年）は、シンガポールが15位でアジアのトップ、日本は4万2782米ドルで17位、香港25位、韓国34位、そして台湾が38位で1万8558米ドル。な



マンションは建設ラッシュだが若者には高額の花

かなか上位に食い込めないのだ（今年度政府は2万米ドルを超すと予測）。

台湾にも最低賃金制度があり、昨年未時点で最低時間給は98台湾ドルだった。コンビニやファストフードのアルバイトもたいてい100から120台湾ドル前後。ハンバーガーショップのセットメニューは110台湾ドル程度、吉野家の牛丼が単品で80台湾ドル前後、すなわちコンビニのアルバイトは、1時間働いてやつと一人分のランチにありつける。一方日本なら、250円の牛丼が3杯は食べられるわけで、若者の暮らしには日本以上の苦しさがあるようだ。

台湾は1月23日に旧暦の新年を迎える。その前に各企業ではボーナスが支給される。今年は、飲食関係が好況で、台中の某焼肉チェーンでは店長クラスで、73カ月分、実に300万台湾ドル近いボーナスが支給されたという。なんと悲喜こもごもの歳末である。

柳本 通彦

やなぎもと・みちひこ
ノンフィクション作家。著書に『台湾・霧社に生きる』『台湾先住民・山の女たちの聖戦』『タロイ峡谷の閃光』（以上現代書館）、『台湾革命』（集英社新書）、『明治の冒険科学者たち』（新潮新書）など。元日本軍人軍属の最後の声を綴った『台湾戦後65年』<http://www.taiwansengo.jp>を更新中。